
悪魔でもバスガイド

キオナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔でもバスガイド

【Nコード】

N9752Y

【作者名】

キオナ

【あらすじ】

引き籠りがちで人と接するのが苦手な少年、しじまぐろの降魔黒乃。

そんな彼の唯一の心の支えは人気カードゲームの萌えキャラクターであり脳内彼女であるフィンディとのラブラブ生活を妄想する事だった。

いつも通り自宅で一人彼が部屋で妄想をしていると玄関のチャイムが鳴る。

人と接したくない彼は当然無視するが、次第にチャイムの鳴るペー
スが早くなりドアノブが何回も回される。

それでも彼が無視していると、無理矢理玄関のドアが破壊され誰かが入って来た。

黒乃は怯えて布団の中に隠れフィンディに助けてを求める。
遂に黒乃の部屋の扉が開き、誰かが黒乃の布団を剥ぎ取った。

黒乃が恐る恐る侵入者の正体を確認すると、そこにいたのは実在しない筈のフィンディが笑顔で立っていた。

フィンディが語るには黒乃を地獄のバスツアーに参加させる為に迎えに来たと言う。

(1 - 1)

「フィンディはやっぱりツインテールの方が似合ってるよ？あ、でも君ならどんな髪型でも可愛いよ？本当だって。」

少女のイラストが描かれた厚紙と楽しそうに会話しているこの少年の名前は降魔^{リクマクノ}黒乃。

彼はもう半年以上学校には行っておらず、人気カードゲームのキャラクターと愛し愛される妄想をしながら毎日を送っている。

彼は元々^{リアル}現実世界の女子も好きになれる普通の男の子だったのだが、好きだった女子が転校してしまい、それならばと何処へも行ったりしない2次元の女の子を愛する事に決めた。

彼が不登校になってしまったのは特に苛めや嫌がらせがなかったからでは無く、単純に脳内嫁との生活に嵌まって抜け出せなくなってしまったからである。

因みに彼がフィンディと呼ぶのは茶髪でツインテールの女の子がバスガイドのコスプレをしているカードで、本来このカードの名前は“悪魔でもバスガイド”だ。

フィンディとは英語で悪魔のような人を意味する“Fiend”を元にして彼が名付けた名前で、この名前を考えるのに約1日も掛けた。

それから30分程経過した時だっただろうか、彼がフィンディに一方的な会話をしていると、自宅のチャイムが突然鳴り響いた。

「誰だろうこんな時間に？ねえフィンディもそう思うよね？」

黒乃は普段から人と接するのは苦手なので家の電話やチャイムが鳴っても絶対に出る事は無い。

いつもは彼の母親が対応しているのだが今日は映画館へ外出中で不在だった。

母親が不在な事を知っていても勿論彼は無視に徹する。

彼は普通の高校生なら学校へ行っている時間帯なのにも関わらず自分が家にいるのは可笑しいと思われるのではないかと不安を抱いており、同時に人前で上手く会話出来ないのではないかという不安も抱いている。

訪問者は誰も出ない事に対して腹を立てているのかチャイムを押す間隔が速くなりドアノブを激しく動かして耳障りな音を立て始めた。しかしそれでも無視をしてフィンディとの妄想に浸っていると訪問者は諦めたのか急に降魔家は静まり帰るが、その直後玄関のドアが吹き飛ばされ誰かが笑い声を挙げながら家に侵入した。

侵入者の笑い声は女性であり、その不気味な笑い声と共に足音が黒乃の部屋へと近付いて来る。

黒乃は今まで味わった事の無い恐怖感に支配され、布団に包まってフィンディに助けを求めた。

遂に侵入者は黒乃の部屋へ辿り着き、扉を開けて小刻みに揺れている布団を見つけると突然毛布を掴み投げ捨てた。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

(1 - 2)

毛布を剥ぎ取られても尚、黒乃は目を閉じていたが数十分経っても侵入者からのコンタクトは無く聞こえて来たのは溜め息の様な音だけだった。

彼は何もされない事を逆に不気味に感じたが、このまま寝た振りをしているも解決がしないのは分かっていたので勇気を振り絞りゆっくりと重い目蓋を開いた。

暫らく目を閉じていた所為で霞んだ視界に映っているのは彼が大切になっているフィンディのカードを怪訝な表情で持っている少女だった。

自分の目に映る少女の姿を見て驚愕した彼は何度も確かめる様に目を擦って確認した後、無意識に一言呟く。

「本物の…フィンディ…!?!」

その言葉を聞いた少女は満足気に頷いて頬を赤らめた。

彼の言った通り、まるで最新の3D技術で投影されたのではないかと疑いたくなってしまう二次元の架空のキャラクターフィンディが椅子に座っていた。

彼女は骸骨の意匠が施された青いバスガイドの制服を着たやや赤みがかった茶髪のツインテールに大きな真紅の瞳…と明らかに現実世界^{リアル}の人間ではない風貌だった。

この時黒乃の中にあつた恐怖心は既に消し飛んでおり、確かにそこに存在しているフィンディを色々な角度から疑望した後、投げ捨てられていた毛布を拾って布団の元へ行き再び包まって眠った。

フィンディは再び布団に包まった黒乃を見るなり椅子からすくっと立ち上がり、今度は彼ごと毛布を掴んで投げ飛ばした。

投げ飛ばされた黒乃は部屋の窓ガラスを割って突き抜け、ベランダ

に転がった。

ベランダに飛ばされていた彼は暫らくの沈黙の後、毛布を被りながら地を這う様に自分の布団のある場所に戻ろうとしたが途中で力尽き気絶してしまった。

気絶してから約3時間後、黒乃は目を覚ました。

ふと窓の外を眺めると外は真つ暗になっており、窓ガラスも修復されていた。

やはり夢だったのかと彼は嬉しいのか悲しいのか判別し難い気持ちを抱きつつ左手を支えにして起きあがろうとした時、何か手に変な感触の物が当たっている事に気付いた。

まさかと思い彼が恐る恐る左を見るとフィンディが恥ずかしそうな表情をしながら隣で横になっていた。

「キャハ？黒乃さんって意外と大胆ですね？」

「ほ、本物だ…本物のフィンディ…それともこれは夢の中の夢…？」

未だに黒乃はフィンディが実体化している事を信じられず、彼女の頬を摘まんで伸ばしたり髪の毛の匂いを嗅いだりしたが最終的にはどう考えても夢や幻では無いという結論を出した。

彼は突然の来訪者に対してどう対応して良いか分からなかったので取り敢えず彼女を座布団の上に座らせてお茶と菓子を目の前に出した。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

しかしフィンディはそれに手を付けず、首を傾げて黒乃をじっと見つめている。

彼は気まずくなり一旦部屋を出て深呼吸をしてから戻るがやはりフィンディは動かず固まったままだった。

無論、彼女と話をしてみたいという気持ちは黒乃にはあるのだが普段カードにしか語りかけていない重度のコミュニケーション障害の少年にとっては高いハードルだった。

それでも彼は夢にまで見たフィンディがこの現実世界に現れるシチュエーションに胸を躍らせており、今直ぐにでも彼女を抱き締めた気分だった。

「ねえ黒乃さん何で黙ってるんですかあ？いつもは可愛いよーとか大好きだよーとかフィンディちゃんマジ小悪魔ーとか言ってくれるのにい…」

何も言ってくれない黒乃を見かねたのか、彼女は日頃自分のカードに言われている台詞の内容をわざと強調して呟きながら彼に詰め寄った。

黒乃はまさか普段何気なくカードに対して言っている言葉がその本人に言われるのがこんなに恥ずかしいとは知らず、顔を真っ赤にして涙目になった。

「な、なんで…なんで知ってるんだよ…」

「キャハ？そんなのいつも一緒いるからに決まってるじゃないですかあ？もー恥ずかしい事言わせないでくださいよー黒乃さん？」

動揺している黒乃に更に追い打ちをかける様に彼女はその後も彼に言われた台詞を何回も言い続けた。

だが黒乃は遂にフィンディの言葉責めに耐えられなくなって部屋を飛び出し、玄関の扉を開けてそのまま走り去ろうとしたが、家の前に停まっていた巨大な物体にぶつかり鼻血を噴き出して倒れた。

通れる筈の道が通れないとは一体何事かと、彼は起き上がって前方を確認するとそこには真黒に染まった怪しいバスが停車していた。あまりにも可笑しい状況に黒乃が呆気にとられて口を大きく開けたまま凝視していると、背後からフィンディがバスの前まで歩いて来てフラッグを小さく左右に振った。

「地獄のバスツアーへようこそ黒乃さん？」

「地獄の…バスツアー…！？ひええ！僕を殺す気だなこの悪魔！人でなし！」

「キャハ？その通りあたしは人じゃなくて悪魔ですよ？あ、でも大丈夫？大事な未来の旦那様を殺したりなんてしませんから♪」

黒乃は何故こんな事になってしまったのか原因を探る為今まで自分とフィンディが繰り広げた妄想会話を再生すると、3日前に彼女がガイドを務めるバスツアーへ行ってみたいと言っていたのを思い出した。

甲斐性が無い彼がそんな突拍子も無い事を言っていたのは、妄想の中でなら何を言っても構わないと思えたからであり、まさか本当に行く羽目になるのなら彼は絶対に言わなかっただろう。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

だがそんな約束よりも今フィンディがとんでもない事を言った事に彼は自分の耳を疑った。

確かに彼女は彼に対して“未来の旦那様”と言ったからだ。

黒乃はいつも妄想で彼女に僕のお嫁さんになって等のアプローチをした事はあったが、彼女の口から自分を認める言葉が聞ける日が来るとは夢にも思わなかっただろう。

この会話だけなら彼は幸せ者なのだが、そもそも何故架空の存在であるフィンディが実体化して彼を迎えに来れたのが不明なままであった。

「ねえ、どうして君が現実にいるの？正直訳が分からないよ。」

「良い質問ですねえ黒乃さん？あなたが持っているあのカード、実はあたし——っと危にゃい危にゃいうっかり口を滑らせる所でした？ってな訳で内緒です、内緒？」

結局黒乃の最大の疑問は有耶無耶にされ闇に葬られた。

ただ一つ確信したのはそれを言おうとした時のフィンディの顔は強張っており、聞いてはならない真実であるのは間違い無い。

彼は前にかなり怪しいが死ぬ程愛しているフィンディ、後ろには安全だが平凡な家のどちらかを選ばなくてはいけない究極の選択に迷っていたが、善く善く考えてみれば家を選んだとしても先程の様に強行手段で家を破壊され連れて行かれるのは間違いなさそうなので彼女に言われるがまま大人しくバスに乗り込む選択をした。

黒乃が乗り込んだバスの中には誰も乗車しておらず、運転手もいなかった。

立っただけでも仕様が無いので彼は一番前にある右の窓側の席に座り、

頬杖を突いて外の景色を眺めているとエンジンの音も掛かっていないのに勝手にバスが動き始めた。

座っている彼の隣の席にフィンディが飲み物の入った紙コップを二つ持って座り、片方を彼に渡した。

それを受け取った彼が中身を覗くと異様に青い絵具の様な液体が入っていた。

「ちょっ…何なのこれ？どう見ても飲み物じゃ無いよねこのエイリアンの血液みたいなの。」

「キャハ？これは地獄名物の天使の生き血で…す？あ、隠し味にいや——ウフフ？」

天使の血は青いという事実にとても残念な気持ちになった黒乃は無言で紙コップをフィンディに返した。

しかし実際は最初は透明だった炭酸飲料水に彼女が大量の惚れ薬を投入していただけで本当は天使の生き血や地球外生命体の血液でも何でも無くただの彼女の欲望の塊だった。

その後彼は自分の飲み物の色が彼女の物と違う事に気付き、冷めた態度でそれを指摘すると彼女は慌てて彼に普通の飲料水を渡した。

「そろそろ来ますので黒乃さん？ちゃんとシートベルト付けてくださいね？」

「来るって何が？誰が来るの？」

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

(1 - 5)

フィンディが黒乃にシートベルトの着用を促すと、急にバスは道路より遙か上空に昇って辺り一面光に覆われたかと思うとバスの前に大きな真黒な門が出現し、バスはその中へ吸い込まれるかの様に入って行った。

この真黒な門こそが黒乃の住んでいる人間界を地獄へと繋ぐ入口である。

黒乃はこの時やっとシートベルトを着用する意味を理解したが、既に座席から落ちていたので意味は無いに等しい。

そんな彼を余所にフィンディは呑気に饅頭を食べながら謎の言語で書かれた雑誌を読んでいる。

「おい！それでも君はバスガイドかーっ！」

「キャハ？心配しなくても黒乃さんの分のお饅頭もご用意してありますから？はい、あーん？」

「あーん…じゃないよ！僕が言いたいののは客の心配ぐらいして欲しいって話！」

彼女は黒乃をからかって面白そうに笑っていた。

黒乃はそんな彼女の態度が気に入らなかったのか自分の座席に戻り、隣に座っている彼女の方を見ない様に体を右に傾けて窓の外を眺めるとそこには美しい花々達が咲き誇っており、一般的な地獄のイメージとは掛け離れた光景だった。

興味津津になっっている黒乃の肩にフィンディはもたれかかりながらこの場所の説明を始める。

「右手に見えますのは、ネクロ高原？ここにしか咲かないブラッディリリスって花はあたし達悪魔には重要な役割があるんですよお？左手に見えますのは、ミスト村？人口400人の小規模な集落ですけどシクレタイトと呼ばれる鉱石の加工技術を扱えるのはここに住んでる悪魔だけなんです？」

フィンディが説明を終えるとそれまで空中を浮遊していたバスは急降下し、近くのミスト村付近へ着陸した。

勿論何も教えて貰えなかった黒乃はまたも吹き飛ばされそうになったが、今度は彼女に息が出来ない程に抱き締められたので吹き飛ばされずに済んだ。

黒乃は行き過ぎた愛情表現をする彼女を無理矢理引き離そうとするが、知恵の輪の様に体を絡ませられて解けないので仕方無く彼女を不格好に抱えたままバスから降りると1人の若い女が跪いている。彼女の名前はユリオ、村長であるソキウス・ミストの娘でフィンディが村に訪れると聞き案内役を買って出た。

「姫様、ようこそ我が村へおいでくださいました。」

「もういつも言ってるじゃない堅苦しいのは止してよ？」

「姫様……？フィンディって姫様だったの！？」

そうフィンディは地獄の姫君、本名はフィンディ・ヘル・アンダーワールド。

この地獄を統べる魔王ルキフェルの娘であり、実は黒乃を地獄に連れて来たのは観光目的では無く彼を夫にするのが真の目的だ。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

ユリオに連れられ、黒乃とフィンディは小さな家屋や建物が並ぶ村中で一際目立つ大きな家の中へと招き入れられた。

黒乃が村中を見て思う限り、少し古い年代の雰囲気はあるが人間界とは余り変わらない。

彼女は薄暗い屋内に無数に配置されている燭台に火を灯し、ほんわりと明るくなった廊下を通って広い部屋に2人を案内する。

そこには立派な髭を生やした厳格そうな老人が椅子に腰掛けており、彼等の姿を確認するなり立ち上がって丁寧にお辞儀をした。

そう、この老人こそがこのミスト村の村長ソキウス・ミストである。彼は先祖代々ミスト村を治める家系の末裔で現在32代目の村長だが自分の身体の衰えに限界を感じており、一ヶ月後には娘のユリオに村長の地位を託す事を決めている。

「姫様、また一段と美しくなれましたな…どうぞそこへ腰掛けてください。ユリオ、お二人に飲み物を用意してくれ。」

「あ、お構い無く。えっとすみませんあなたは…？」

「申し遅れました私、この村の村長を務めておりますソキウス・ミストと申します。そこにいるのは娘のユリオです。以後お見知りおきください。」

「成程…村長さんでしたか。僕は降魔黒乃——いや、地獄風に言うならクロノ・ゴウマ…ですかね？」

因みに黒乃の名前の由来は両親がかつて飼っていた黒猫の様に賢くなつて欲しいという願いが込められて名付けられた。

しかし当の本人は不吉の象徴の迷信がある黒猫に肖った名前を毛嫌いしており、この名前の所為で今まで不幸な人生を送って来たと思いい込み両親を恨んでいる。

「ねえねえソキウス、あれ用意出来てる？」

「勿論です。ユリオ、あれを持ってきてくれ。」

「ん？あれって何？フィンディ？」

「キヤハ？教えちゃったら黒乃さんのとくても可愛い驚いた顔が見れなくなっちゃうじゃないですかあ？」

ユリオは扉を開けて部屋から出て行き、暫らくすると黒い布に包まれた細長い物体を両手に抱えながら部屋に戻って来た。

彼女はフィンディにそれを渡すと、酷く疲れた様子で椅子に腰を掛けゆっくりと紅茶を啜った。

この重量感のある黒い布に包まれた細長い物体の正体はミスト村秘伝のシクレタイト加工技術により生成された魔剣“獄炎”で、斬り裂いた者を決して燃え尽きない地獄の業火で焼き尽くすと言われている。

だが“獄炎”は人を斬る為では無くある儀式に使われ、その真価は黒乃とフィンディにとってのみ発揮されるだろう。

「それは……！？」

「フフ？何で剣なのって顔をしていますねえ黒乃さん？なんと、これを魔王城にいらっしゃるお父様にお渡しすればあたし達は夫婦になる事が認めて貰えるんですよお？」

「ぶっ！夫婦！？そ、そりゃあ嬉しいけど…僕高校生だし働いてないし根暗だし引き籠りだし頭悪いし格好良くないし運動神経皆無だしえーっとそれからそれから——とにかく僕なんかじゃ無理だろう…」

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

夫婦——それは愛し合う男女がお互いを支えて行く美しい事。

フィンディが言い放った言葉は所詮妄想の中でしか人を愛した事が無い黒乃には荷が重過ぎる言葉だ。

幾ら妄想の中で男らしく“好きだ”、“結婚して”と言っても現実^{リアル}世界の彼は自分に自信が無いマイナス思考の人間でしか無い。

しかしフィンディは彼の消極的な態度に呆れる所か惚れ惚れしており、ある意味2人の相性は抜群に良いのかも知れないが。

「ええ〜だってフィンディは僕の嫁って言ってたじゃないですかあ？それにあたし黒乃さんにあんな恥ずかしい事されたのに……うう、もうあたしお嫁に行けないです……っ！」

「ちよっ！誤解される様な言い方はしないでよ!？」

「もう姫様に手を出しているとは……流石ですね黒乃様、やる事が早い。ですが紳士ではありませんね。」

「ユリオさん違います！僕は紳士です信じてください！」

「キャハ？そうよユリオ、黒乃さんは変態という名の紳士なんだから？」

フィンディの策略でもう後には引けなくなった黒乃は素直に彼女と夫婦になりたいと認めた。

つまりこれから黒乃とフィンディは力を合わせて協力し地獄の最北端にある魔王城を目指す。

何れにせよ夜遅いこの日はミスト家に泊まり、2人は夕食をご馳走

して貰う事になった。

黒乃がテーブルに着くと置かれているのはナイフとフォークとグラスにナプキン——地獄の食事はどうやら洋食の類らしいのだが普段箸しか使わない彼がテーブルマナーを知る筈が無い。

無情にもシェフが次々と運んで来る料理を美味しそうに頂くフィンディ達を気拙そうに眺め、見様見真似でナイフとフォークを握ってみるがやはり上手く出来ずに皿と食器を接触させて耳障りな音を発ててしまった。

当然それを聞いた皆は彼を注目し、不思議な顔をする。

「あ…えと、実は僕こうゆうの初めてで…ごめんなさい。」

「こつちこそごめんなさいです…あたしが勝手に知ってると思い込んで…」

「フィンディ、もし良かったら教えてくれないかな？夫になる僕がこんなんじゃないや君に恥を掻かせちゃうからさ。」

「！——はい旦那様っ？」

黒乃の口から夫になるという言葉聞いたフィンディは天使の様な頬笑みを浮かべた。

彼女は飲み込みが悪い黒乃に腹を立てる事も無く数時間も掛けて手取り足取り優しくテーブルマナーを教えたが、勿論彼は全てをマスターしてはいないのでこれから地道に覚えさせるつもりだ。

長時間の特訓を終えた2人は風呂へ入り、後に就寝する為に2階の来客用の部屋へ上がった。

部屋の中には相部屋なのに大きなベッドが一つしか無く、必然的に黒乃とフィンディは一緒に眠らざるを得ない。

この時、時刻は午前2時を周り既にソキウスとユリオは床に就いて

> i
 3
 5
 3
 1
 0
 —
 4
 3
 7
 1
 <

いる。

「黒乃さん？あたしが寝てる間に悪戯したらお仕置きですからね？」

「すつ、する訳無いだろ！おやすみつ！」

自分の悪巧みを簡単に見透かされた黒乃は拗ねてフィンディから背を向け目を閉じると、彼女も鼻で笑い背中合わせになる様に彼に背を向けて眠り始める。

当初黒乃はフィンディの事を考えずにいられたが、30分経った頃には興奮して性的欲求が抑えられなり完全に目を覚ましてしまう。そんな事とは露知らず、小さな吐息を立てて穏やかに眠るフィンディを黒乃は強く抱き締めると仄かに甘い匂いがした。

ここで止めておけば良かったのだが彼の既に理性は崩壊し、本能を取り戻した一匹の雄と化している為ブレーキは掛からない。

だが勢いに任せ黒乃が目を閉じてフィンディに口付けをしようとした時、計り知れない恐怖が幕を開ける。

不可解な唇の感触に悪寒がした彼が目を開くと、フィンディが悪戯な笑みを浮かべながら人差し指で彼の唇を抑えていた。

「あ…お、おはようフィンディ…」

「キャハ？いけませんよお黒乃さん？こーゆーのは——結婚してからにしましょうねえ…っ！」

「ひいっ！」

忠告した通りフィンディは黒乃にお仕置きをする。

黒乃は縄で手足を縛られて一晩中廊下に放置された後、起こしに来

たユリオに縄を解いて貰う。

「黒乃様にはそういう趣味があったのですか。仮にも他人の家なのですから自重してくださいね？」

「いや僕SMプレイに興味無いですから…まあ解いてくれて感謝します。」

「では姫様を起こして降りて来てください。朝食の準備が整っておりますので。」

黒乃はベッドですやすやと眠るフィンディを優しく擦って起こし、1階に降りた。

テーブルに置かれているのは紅茶、焼き立てのトースト、卵料理、オートミール等々——どうやら地獄の食文化は人間界の西洋に酷似している様だ。

因みに昨日はフィンディをもて成す為に村一番の料理人に夕食を作らせたが、今回はユリオの手料理である。

何れにせよ他国の食文化を知らない黒乃からすればとても興味深い物であるのは間違い無いだろう。

「ごちそうさまっ。ユリオさんの料理とっても美味しかったです。」

「お気に召した様で何よりです。またいつでもご馳走しますよ?」

「じゃあお言葉に甘えてもう1週間くらいお世話になろうかなあ。えへへ…」

「へえ…黒乃さんはお仕置きが足りないみたいですねえ?」

「もう勘弁してよ？冗談だつて。」

朝食を終えた黒乃は身の丈程ある“獄炎”を背負い、フィンディと共にミスト家を後にした。

この日はまるで2人の旅路を祝福するかのように雲一つ無い晴天で、時々吹くそよ風が重荷を背負い疲れた黒乃を励ましてくれている。

そして2人は村を抜け停車してあるバスの前まで辿り着くと、弓矢を持ち緑色のTシャツを着た男が待ち構えていた。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

(1 - 9)

男の名前はレラジェ・グリーン、魔王直属部隊“地獄72柱”の序列14番目の騎士である。

“地獄72柱”とは魔王が地獄中から集めた精鋭の悪魔達で数字が少なければ少ない程強い力を持つ。

その中で14番目の実力者であるレラジェが黒乃達の前に現れたのは、魔王の命により黒乃がフィンディに相応しいかどうかを見極める為だ。

これから黒乃達が魔王城に向かう旅路は、彼を含む72人の悪魔達が行く手を阻む刺客となつて襲い来る事になるだろう。

「オッス、君が噂に聞く人間ツスか？」

「え？ああそうですけど？あなたは？」

「オッス！俺は泣く子も黙る“地獄72柱”が一人、レラジェツス！」

「えーと…レラジェツスさん？その凄そうな名前の“地獄72柱”の方がどんなご用ですか？」

「なっ！俺の名前はレラジェツスじゃないツス！レラジェツス！」

「何だかややこしいなあ…で、レラジェツ——レラジェさんが何の用ですか？」

レラジェの紛らわしい喋り方を少し面倒と思いながらも黒乃はなるべく丁寧に質問すると、自分の名前を正しく覚えて貰えた事に満足

したのか、彼は腕を組んで何かに納得して頷く。

突然レラジエは真剣な顔をして背中の中矢筒から矢を1本取り、弓に装填して黒乃に放った。

黒乃は間一髪所でフィンディに押し倒されて避けたが、何故レラジエに狙われたのか分からず困惑する。

怯えて縮こまる黒乃を庇う様にフィンディは彼の前に立ち、レラジエを睨んだ。

「いきなり不意打ちとは随分と手荒ねえレラジエ？」

「攻撃？まさか。俺はそんな卑怯な真似はしないツスよ。ってか姫様ともあろう方が後ろの殺気に気付かなかったツスか？」

「後ろ…？」

フィンディが後ろに振り返ると、矢で射抜かれた巨大な蜘蛛が急速に腐敗し息絶えていた。

この巨大な蜘蛛の名前はアラクネー、地獄に生息する肉食蜘蛛で特に悪魔や人間が好物である。

もしレラジエが矢を放たなければ黒乃もフィンディも今頃美味しく食べられてしまっていただろう。

つまりレラジエは元々黒乃の命を助けるべく矢を放ちアラクネーを退治したのだが、少々やり方が粗暴過ぎた為に誤解されてしまった。それはさて置き先程まで生きていたアラクネーが急速に腐敗したのはレラジエの能力で、彼が放つ矢には壊疽効果が付与され射抜かれた者は必ず壊死してしまう。

悪魔には彼のように人間で言う魔法や魔術が扱える者がおり、その能力を総称して“せんま閃魔”と呼ぶ。

身体的特徴は人間と何ら変わりの無い地獄の住人達が悪魔と呼称されるのはその所為であり、厳密に定義するなら彼等も人間である。

>
 i
 3
 5
 3
 1
 0
 —
 4
 3
 7
 1
 <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9752y/>

悪魔でもバスガイド

2011年12月1日02時54分発行